

断について報告した。患者は21歳の男性。智歯抜歯依頼および左側下顎臼歯部の精査・加療目的に紹介来院した。また、既往歴および家族歴については特記すべき事項はなかった。初診時、顔貌の変形、疼痛および腫脹などの特記すべき症状はなく臼歯部の歯肉にも著変は認めなかった。また、触診による骨の膨隆はなく波動や羊皮紙様感も認めなかった。パノラマエックス線写真で左側下顎埋伏智歯の直下で下歯槽管に連続する、20mm×20mmの類円形、単房性の境界明瞭なエックス線透過像を認めた。CT写真より、病変は類円形で内部に石灰化物などを含まない、ほぼ均一の像を示した。また、病変により下顎骨のわずかな頬舌的膨隆を認め、皮質骨の非薄化を認めた。また、再構築像より下顎管と病変との連続性が疑われた。顎骨良性腫瘍の臨床診断のもと全身麻酔下で、抜歯術および顎骨腫瘍摘出術を施行した。同歯を通法に抜去したところ抜歯窩より病変を確認することができず、左側下顎埋伏智歯とは別個の病変であることが判明した。そこで、頬側の歯槽骨を一部削除して病変にアプローチした。病変摘出時、周囲骨からの剥離は容易であったが、下歯槽神経の一部と連続しており、神経本幹を可及的に損傷しないように切除した。また、病変摘出後の骨面を十分搔爬し、開放創として手術を終了した。摘出された病変は、表面がなめらかな卵円形で帯黄白色の弾力性のある腫瘤であった。術直後より、左下唇・オトガイ部の知覚鈍麻を認めたが、その後暫時症状は改善し手術後現在では日常生活に支障がない程度回復した。さらに、病理組織学的所見では、紡錘形細胞の増殖と膠原線維の束状・交錯増生を認め、一部には、リンパ球、形質細胞、組織球が浸潤していた。しかし、腫瘍内に歯原性上皮や神経束は認められず、核の異型性や分裂像も認められなかった。病理組織像より、類腱線維腫と考えられたが、手術所見から神経原生腫瘍が疑われたため、鑑別のため免疫染色を行った。免疫組織化学的検索では、S-100タンパク、神経特異性エノラーゼ、グリア線維性酸性タンパクとビメンチンが陽性を示したが、デスミンと α 平滑筋アクチンは陰性であった。これらの臨床所見と組織学的所見を総合して、下歯槽神経由来の神経線維腫と診断した。また、今回取り扱わなかったが、神経細胞の中間径細線維であるNFPは3つのサブユニットタンパクから構成されており、これらのタンパクに対する抗体は神経細胞系の細胞に対する特異性が高いため、診断を下すのにさらに確実になると思われる。現在、術後2年6か月経過したが、再発傾向は認めていない。しかし、今後とも十分な経過観察が必要と考えている。

5. 第3回朝日大学歯科医師臨床研修指導医ワークショップの概要

横山 貴紀¹⁾・岩堀 正俊¹⁾・住友伸一郎²⁾
田辺俊一郎²⁾・脇坂 孝³⁾・松岡 正登³⁾
北後 光信⁴⁾・吉田 隆一⁵⁾・藤原 周¹⁾
倉知 正和¹⁾

(¹⁾朝日大学歯学部口腔機能修復学講座
歯科補綴学分野)

(²⁾朝日大学歯学部口腔病態医療学講座
口腔外科学分野)

(³⁾朝日大学歯学部口腔病態医療学講座
歯科放射線学分野)

(⁴⁾朝日大学歯学部口腔感染医療学講座
歯周病学分野)

(⁵⁾朝日大学歯学部口腔機能修復学講座
歯科保存学分野)

事後抄録

平成18年4月から必修化される歯科医師卒後臨床研修制度の実施に向けて本院でもハード・ソフト面での整備を必要としている。特にソフト面においては「主たる研修施設」のみでなく、「従たる研修施設」においても教育能力のレベルアップが求められている。それを従来は歯科医療研修振興財団主催の臨床研修指導医講習会（以下、ワークショップとする）が担っていたが、平成16年4月からはその内容が一定レベルであると厚労省が認めたものという条件下で大学でも実施することが可能となった。

今回は、平成16年11月6、7の2日間コースで実施した第3回のワークショップの概要を報告する。

スタッフはディレクター1名、タスクフォース9名、そしてゲストスピーカ2名の合計12名から構成した。受講者は、本学からは臨床系分野の教員9名、PDI1名、村上記念病院1名そして基礎系分野の教員1名の計12名、そして学外の従たる施設から14名の総計26名であった。これを、各班6、7名から構成するA～Dの4グループに分けた。

ワークショップのスケジュールは、全13のセッションから構成されているが、その内容は受講者への情報提供としての「研修の必修化」で今後の研修はどの様になっていくのか、現在とはどの様に変化していくのか、をまず説明し、そして日常臨床において非常に身近で、しかも重要な課題と位置付けられる「医療事故とその対策」、「医科における病診連携」についてゲストスピーカーによる講演が行われた。次いでKJ法を用いて「リスクマネジメントについての問題点の抽出」作業を行った。その後、参加者個々が各グループ内で活発な意見交換が可能となるのを促進するため

に、アイスブレイキングとして「船長の決断」を課題としたコミュニケーションゲームを行った。ついで、研修目標 GIO, SBOs・研修方略 LS・研修評価 EV をワンユニットとしたカリキュラムプランニングの作業に入った。各班のユニット名はAグループが単純窩洞の形成と修復操作, Bグループが歯周初期治療, Cグループが抜歯そしてDグループが全部鑄造冠による歯冠修復処置とした。

2日目の後半には、前日のKJ法により抽出した複数の問題点から、2次元、3次元展開法によって決定した最優先で協議すべき問題点についての対応策の作製作業を行った。

ワークショップの内容については、詳細な記録を公表しているので、今回はワークショップの評価として受講者の Faculty Development の効果についてのアンケート結果について報告する。

各セッションにおける修得度を受講者が自己評価した結果、いずれの項目も“理解はできたが応用は不十分である”との回答が6~7割であった。しかし十分に理解できなかった項目としては、“研修方略”と複数の問題点から優先度の高いものを選択する方法である3次元展開法における“改善への抵抗の克服”が挙げられた。

受講者が非常に興味を持った項目については、“KJ法”と“GIOとSBOsの区別”が最多の8名で、これは先に示した修得度が比較的高い項目であった。一方、最小は“評価方法とその特性”が“教育目標分類”がそれぞれ1および2名であった。この2項目は、まず教育目標分類の3領域が区別できないと適切な評価方法の選択が困難となる為ではないかと思われた。

本ワークショップの内容についての評価は、総論的に内容はかなり価値があるが、やや難しく、このような形式の教育方法はある程度~かなり効果があり、本人の興味にある程度合致していたとの回答が得られたが、時間についてはやや多いとやや少ないがそれぞれ30数%を占めた。これは受講者のモチベーションの相違が表れたものと考えられる。なお、1名の受講者は内容を全く評価しないと、本人の興味とは全く合致していなかったという非常に残念な回答をしている。

ワークショップで得た成果に関連して今後1年間で実施したいと考えている内容では、カリキュラムの作製が最も多く、次に評価シートの作製が続いた。その他、スタッフにフィードバックを行いたいとの意見もあった。

以上より、第3回ワークショップを2日間終えて参加者の評価は、カリキュラムの内容が多いという意見があったものの、ワークショップを開催することに對

し、参加者のほぼ全員が賛成しており、指導医の資質、指導力のさらなる向上を目的としたワークショップを開催することの重要性が示唆された。

座長 兼松 宣武 教授

6. 朝日大学歯学部附属病院の歯科救急外来の現状

○森 靖博・笠井 唯克・岩島 広明・藤本 雅子
江原 雄一・桑島広太郎・水谷 豪・池田 昌弘
安田 順一・田邊俊一郎・広瀬 尚志・住友伸一郎
玄 景華・兼松 宣武

(朝日大学歯学部口腔病態医療学講座
口腔外科学分野)

われわれ朝日大学歯学部附属病院では平成13年10月1日より歯科救急外来を開設して以来、夜間および休日に時間外歯科診療を希望する患者を24時間体制で受け入れている。当院の歯科救急外来の診療時間は平日16時30分から翌日9時まで、土曜日は12時30分から翌日9時まで、日曜および祝日は9時から翌日9時までの時間帯で歯科診療に当たっている。

診療スタッフは口腔外科の当直医1名と一般歯科の日直医1名の2人で診療にあたり、このうち日直医は0時までの勤務となっており、0時以降は当直医1名となる。

今回、われわれは朝日大学歯学部附属病院の歯科救急外来における患者受診状況について調査し以下のような結果を得たので報告する。

調査期間は平成13年10月1日より平成16年12月31日までの3年3か月間である。

1. 調査期間中の受診患者総数は4,729人であり、一日あたりの受診患者人数は平均3.98人であった。
2. 年度別の受診患者数では平成13年度は調査期間が3か月間と短い事もあり345人となったが、それ以降平成14年度が1,384人、平成15年度が1,491人、平成16年度が1,509人とわずかながら増加傾向を認めた。
3. 性差別の受診患者数は男性が2,691人(56.9%)、女性が2,038人(43.1%)とやや男性が多かった。
4. 受診時間帯別の受診患者数では、平日は21時台302人(14.9%)、土曜日は13時台(11.7%)、日曜および祝日は9時台(19.7%)がそれぞれ最も多かった。また各日0時以降の受診患者人数は減少傾向を認めた。
5. 年代別の受診患者数では20歳代が1,230人(26.0%)と最も多く、次いで30歳代が857人(18.1%)、10歳未満589人(12.5%)と順に多い結果となり、比較的若い年代の受診が多かった。